

國學院大學學術情報リポジトリ

武田祐吉の〈古事記学〉：講義ノートを通して：
講義録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 周平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001947

【講演録】

武田祐吉の〈古事記学〉

—講義ノートを通して—

青木周平

我々の「國學院の学術資産に見るモノと心」グループでは、「近代人文学の形成」として国文では三矢重松・折口信夫・武田祐吉、その他の分野では宮地直一・河野省三・大場磐雄の研究を、展示物（モノ）を通して心を探っています。ここでいう心とは國學の心であります。その伝統的な國學院の学問の心を極めたいという狙いで、日々研究を行っております。本日、私が用意したのは「武田祐吉の〈古事記学〉—講義ノートを通して—」という資料でございます。武田先生の学問で〈古事記学〉と書いておきました。〈古事記学〉という用語があればいいないつも思っていたのですが、実は武田先生が本学に寄贈して下さいました講義ノートの中に〈古事記学〉という言葉が見つかりました。うかつにも私は昨日気づいたのですが、それが皆様に配りました資料の一枚目からの下段から二枚目三枚目までが武田先生の直筆の講義ノートです（別掲資料参照）。武田先生は講義の際におそらくこれくらいの紙をいつもお作りになって、ご覧になりながら講義をなさったようです。このノートを眺めますと、このように御本人が作られた本の初校などの要らなくなった紙、その裏紙を使っておられます。調べますとだいたい昭和十二・三年のものです。この『古事記』の講義ノートは、明治書院から出ています『太平記』の裏紙を使つて作つていらつしやいます。ちよつと慣れるまで見づらいですけど、先生は達筆ですので、ほぼ読めるかと思ひます。そういう講義ノートを用ひまして、武田先生が学生に講義したものに「古事記研究（古事記学）」があり、ここに〈古事記学〉という言葉があります。こ

れを見て私は膝をたたきました。まさに〈古事記学〉をどう展開するか、それが恐らくは國学研究の中の一つの柱になるのであるうと思ひれます。そこで、この〈古事記研究〉に関係があるだろうと思ひれますカードを、私なりにピックアップしまして、皆さんのお手元に二枚目三枚目にプリントしてございます。これは後で解説いたします。

まず、最初に本学が行っておりますこの文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の「國學院の学術資産に見るモノと心」、これを私なりにどう捉えているのかというところからお話を始めます。

《資料》

伝統文化リサーチセンターの仕事

○國学（総合的日本文化学）を中心とする本学所蔵の学術資産の発掘・整理・分析を通して、近世から今日までの人文科学系の学問史を総合化する。

武田祐吉の〈古事記学〉

一、拙稿「武田祐吉の國学的研究—古事記を中心に—」（『日本文化と神道』第一号 平成十七年二月）

二、拙稿「武田祐吉の古事記研究—『古事記説話群の研究』を中心に—」（『日本文化と神道』第三号 平成十八年十二月）

三、第六回校史・学術資産研究会発表「武田祐吉の歌謡研究―『琴歌譜』を中心に―」(平成二十年一月十六日)

《武田学の継承》

研究面―研究史的位置付けと文献学的方法の継承と深化

教育面―講義や講演の実体の究明による教育方法の継承と深化

「伝統文化リサーチセンターの仕事」と題して、最初にまとめてございます。「国学」これを別な言葉で言いますと、「総合的日本文化学」とこの資料にも書いてございます。この国学を中心とする本学所蔵の学術資産の発掘・整理・分析を通して、近世から今日までの人文科学系の学問史を総合化する。これがねらいです。非常に大きいねらいです。「国学」は総合学です。文学とか史学とか、あるいは法律とかですね、そういった学問を総合的に研究する必要があります。そういう流れの中で武田祐吉という研究者を我々は先達として国学の中に意味づける、その研究を私は中心にしております。武田祐吉の《古事記学》、以下、《古事記学》とは何かということを考えるための一つの資料として武田先生の講義ノートから考えていつてみたいと思います。私の武田学に対する考え方は、一から三にあげました論文あるいは研究発表等で、既にその一端を示させていただいております。私がここで大事だと思うのは、武田学の継承というところで研究面と教育面と二つに別けておきました。武田先生の学問は現在の『古事記』あるいは上代文学、国学研究においてどういう意味を持つのかという研究史的位置づけ、これが近々の課題です。そして、その方法論、文献学的方法、それを我々がどのようにに継承し、そして深化させていくのか、それが國學院の学問伝統というものになるうかと思えます。もう一つが教育面です。研究は教育に反映されねばなりません。その教育面において、もつとも柱となるのが講義です。その武田先生の講義のあり方、講義の内容、実態を究明することによって、我々はこれから伝えるべき教育の内容、主に方法論を継承してまた進化させねばならない。研究

と教育は両輪です。この「学術資産に見るモノと心」という真の役割は、決して研究だけではないのです。それをどのように教育として還元していくか、その点を武田先生の講義ノートを分析しながら考えていつてみたいと思っております。

それでは、さっそくですが講義ノートを見ていききたいと思います。

《資料》(別掲資料一)

古事記研究(古事記学)

提示

総説

古典論
書史

本論、分解と総合(部分と全体)

分解

帝紀

本辭

全体

まず一枚目の下段。「総説」と走り書きがあります。これは武田先生が《古事記学》というものをどう考えるか、その大きい柱ですね。考え方を提示したものだと思われれます。これは実は武田先生の『古事記』の代表的学問、『古事記研究 帝紀攷』(昭和十九年 青磁社)および『古事記説話群の研究』(昭和二十九年 明治書院)、この二著におきましても示されております。したがって、この講義ノートにおいて明らかにする、そういう内容を持っております。「提示」と「総説」、「総説」のところでは古典論と書史とあります。武田先生は國學院に最初に赴任なさったときに、お持ちになりました講義は書史の講義です。つまり『古事記』とか『日本書紀』とか『風土記』とかいろいろな文献の書史を解題する、そういう講義でした。おそらくそこから先生の講義ノ―

トが始まるんだろうと思います。「分解と総合」、ここにちよつと注目していただきたいと思います。「分解・帝紀・本辞・全体」とあります。ここに一つの先生の『古事記』に対する考え方があります。どういふことかといひますと、『古事記研究 帝紀攷』の序文の中に、「帝紀は、その主脈を成す成文であつて、これに對して、本辞は、その源流を成すがごとき性質にあるものといふことができよう。」(初出は昭和十九年刊の青磁社であるが、本稿の引用は『武田祐吉著作集』第二巻に拠る。著作集九頁)と書いてあります。つまり、『古事記』の中で帝紀、これは主に系譜とか、あるいは皇族の記事とか、主に天皇の系譜を想定すればいいかと思うんです。「帝紀は、その主脈を成す成文であつて、これに對して、本辞は、その源流を成す」、この考え方が、本論にあります。「分解と総合」といふ考えに反映されております。帝紀は分解することによつて、それぞれの天皇系譜の持つ意味が明らかになります。『古事記研究 帝紀攷』ではそれをなさつております。それに対して本辞はあくまでも『古事記』の源流をなすものである。つまり『古事記』を通して、古代の説話あるいは物語のあり方を探る、そういう意味なのである。そしてそれを「統合」といふ精神のもとになさねばならない、ということです。「分解」と「総合」、この二つの柱をもつて『古事記』は研究されねばならないということなんです。このことは武田先生にとつて、『古事記』は一つのテキストではなく、『古事記』そのものが歴史であるという考えに繋がつております。『古事記研究 帝紀攷』の、三段落目の四行目「まず『古事記』自身の歴史的展開をながめねばならぬ。そしてこれはひとり記事の前後の關係においてのみでなく、一の記事自身の中にもその歴史的展開の跡の見るべきがあるのであつて、こういう点に、特に注目を払うにいたつたのは、現代における『古事記』研究の特色といふべきであらう。」(九頁)という考え方です。これは私が前に「武田祐吉の国学的研究」の中でも述べましたけれど、武田先生の『古事記学』は、いわば『古事記』そのものの中に歴史が、そしてそれは『古事記』の天孫降臨とそれからうけひの段によつて、いわば『古事記』の歴史的展開が成されて

いる、跡づけられているという主張と重なつてまいります。この考え方に基づき、先生は一つの帝紀のモデルを出してらっしゃいます。それは、別紙の講義ノートに「古事記 綏靖天皇の御記」とあります。武田先生はこの系譜の分析のモデルを綏靖天皇記に求められています。いうまでもなく、綏靖天皇とは「欠史八代」の最初の天皇です。先生の帝紀の分析のモデルは欠史八代であります。その欠史八代の綏靖天皇に、おそらくこれを用いて学生たちには帝紀の講義をなさつていたと思われまゝ。そして、もう一つ帝紀の考える柱になるのが、『古事記』序文の解釈です。それが次の講義ノートです。

《資料》(別掲資料二)

古事記序文における

帝紀と本辞

帝紀の考察

本辞の考察

二者の取り扱ひ方

二者の結合状態

古事記の方針

その目的にもとづくもの

古事記の性格の成立

日本書紀における取り扱ひ方

こういう走り書きの中に、先生の帝紀と旧辞、あるいは『古事記』の扱いに對する一つの考え方、方法というのが提示されております。この問題を更に具体的に、どういうことで『古事記』を考えなければならぬのか、帝紀とは何かを考える、その資料が、次の講義ノートに用意されております。

《資料》(別掲資料三)

正倉院文書

続修後集第十七卷

更可請章疏目錄

帝紀二卷 日本書

天平二十年

日本帝紀二卷 天平十九年

上宮法王帝説

案帝記曰少治田天皇之世東宮既戸

豐聰耳命大臣宗我馬子宿祢

共乎章而建立三宝

持統紀二年十一月

直広肆当麻真人智德奉誅皇祖等

之騰極次第礼也 古云日嗣

皇極紀欽明大葬

息長山田公奉誅日嗣

これは一枚になつて書かれております。先生は帝紀とは何かを考えるとときに、もつとも大事にした文献を正倉院文書の中に求めております。正倉院文書を武田先生は大正九年、十一年に正倉院御物の撮影をなさっております。これは当時においては極めて珍しい貴重なことです。この正倉院文書の中から「続修後集第十七集」と書いてあります、そういう文献、あるいは「更可請章疏目錄」「帝紀二卷」、こういうのを発見なさいました。ここに『帝紀』二巻とあります。これが『古事記』でいう帝紀にあたるのであろうということ、初めて指摘したのは武田先生です。それが正倉院文書の調査から出てきたのです。そして、帝紀を考える資料として、その次に『上宮法王帝説』という聖徳太子の伝記です。それと持統紀二年十一月条、こちらに載つてお

ります、「皇祖等之騰極次第」の誄しるし、これと皇極紀の舒明天皇の大葬の条にございます、息長山田公の日嗣の誄、これらが帝紀の資料です。我々は『古事記研究 帝紀攷』を読むと、さあつと読み流してしまいましたが、何が資料の柱かというところ、おそらく絞つていくとこの四つになります。こういうところに先生の講義ノートの意義があります。こういうものを求めて、先生が帝紀とは何かを考えたということになります。そして、次の講義ノートに置きましたのが『古事記』を研究する際にどういうところに注目し、また方法的にどういうところに注意をして行かうか、そういうことを書いた走り書きのメモです。まず、先ほどの『古事記研究 帝紀攷』でいいました、帝紀の具体的内容については次のように書かれています。

《資料》(別掲資料四)

提示

古事記の存在

イ、その成立に於いて

ロ、その伝来に於いて

伝来を通してその成立を窺ふ

伝来し存在することの意義

研究法

イ、その周囲から文献、書史、時代

ロ、物的観察 言語(文学)による表現

ハ、内容 訓詁と解釈 啼いさちき 精神の把握 見しめき

ハ、内容 訓詁と解釈

解釈

分析と総合(部分と全体)

太古史としての意識

過去表現としての言語

今との比較

今に至るまでの図柄

倭健 大御葬

これが、先生の方法論の一つの特徴です。つまり、先生の論文は「『の伝来』というのが多いんですね。つまり、その書物が至った伝来の過程の研究を通して、その存在意義を究明する。これが、一つの方法として一貫していることです。その研究の特徴として、イロハの三つに別けてあります。「イ、その周囲から文献、書史、時代」、こういうところから作品というものは究明されなければならない。文献というのは文献的性格という意味です。文献としての性格という意味です。「ロ、物的観察 言語（文学）による表現」は物として観察する、これは言語表現に注目する、言語・文字による表現というところで考えるということです。「ハ、内容 訓詁と解釈 精神の把握」とは、訓詁と解釈を通して精神の把握を行う。このイロハという三つに別けてあります。これが、総合して文献学的方法ということなんです。我々は文献学的方法といえ、文献を扱えばいい、資料を分析すればいいと考えがちですが、そういうのではない。文献学とは文献そのものというより、文献の周辺を見なければなりません。当然それは書誌的な問題、時代的な問題、それから本質論では言語、文字、その働き、言語表現としての作品、そこに一つの文献学の方法をみることができます。解釈として分解と総合（部分と全体）、これが先ほどいいました、古事記研究、〈古事記学〉の柱です。つまり、旧辞にあたるのが「総合」です。帝紀にあたるものが「分解」です。こういう形で、分解と総合をつなぎ合わせることによって、一つの『古事記』の究明する姿勢が浮かび上がります。これらの講義ノートは、必ずしも同じ時に使われた保証はありません。バラバラのものです。それをたぐり寄せて行くと、図らずもこういう流れが見えてくる。研究に対する方向が見えてくる。そういう意味で考えることができます。そして先生のもっとも大事にした言葉は

「稽古照今」という言葉です。必ずどの文献でも書かれているのは、今が大事だということなんです。古典研究にとって今が大事である。まさに「太古史としての意識」、「過去表現の言語」ではあるんだけど、それは今と比較しなければならぬ。その考えが、最後に「今との比較」というところに見えております。さりげない書き方ですが、こういうところに先生が何をもとにしたかということが窺えます。この考え方が、〈古事記学〉と称しているものであるならば、その組織というものが以下の講義ノートに提示してございます。

《資料》（別掲資料五）

組織

分解の可能

- 一、文章 大げつひめ
- 二、事実 速吸名門
- 前後 天の日矛と伊豆志袁登賣
- 三、不整備 すさのを系譜

大国主神

大国主

- 1、国土平定 古語拾遺の大地主神
- 2、相聞
- 3、大国主の系譜
- 4、少名毘古那 書紀一書
- 5、大神神話
- 6、大年神の系譜

方法論としての書記との比較

- 相違文字 宇比地迹 埴土煮
- 度琴度 建絶妻之誓

絶妻之誓此云許等度

うきじまりそりた、して

言語

布刀詔刀言禱白而

中臣遠祖天児屋命

則以神祝祝之

順序

繁栄

内容 猿女君

有無

これは、例えとしてオホゲツヒメがあげてあります。オホゲツヒメの神話は挿入神話といわれます。そこを分析することによって、文章としての特徴が見えるだろうという含みであろうと思われまゝ。それから次の「事実・前後」は、歴史的事実としてどのように見たいのかを考えるときの資料として、「速吸名門」と「天の日矛と伊豆志袁登賣」の二つを代表としてあげています。「速吸名門」は、神武東征段において「古事記」と『日本書紀』で記述される順序が異なっており、「天の日矛と伊豆志袁登賣」も、『古事記』では応神天皇条に、『日本書紀』では垂仁天皇紀に描かれ、事実として順序が異なっていることを指しています。三番目として「不整備」。「すさのを系譜」と「大國主神」をあげてあります。「不整備」とはどういうことか、これは出雲神話の存在意味を意味しています。出雲神話は大國主神の国土の平定をはじめとして、次の「相聞」は八千矛神と沼河比売、須勢理毘売命の神語りを指したものです。次の「大國主の系譜、少名毘古那、大神神話、大年神の系譜」といったものは『日本書紀』の一書にございます。あるいは『古語拾遺』にございます。ここで意識しているのは、日本神話の不整備の根源は、出雲神話にあるという考え方です。その出雲神話を考えることによって、神話を分析しその不整備の意味を問うという、そういう目的が窺えます。

次に「方法論としての書紀との比較」とあります。私が最後に注意したいのはこの部分です。『日本書紀』との比較です。『古事記』を知るためには『日本書紀』と比較しなければならぬ。これは当たり前のことのようだけれども、例えば本居宣長は『日本書紀』は漢意にまみれているから見ては駄目だといっている。本人は駄目だといっておきながら、研究には比較をして、ちゃんと取り入れているんです。『古事記』の研究、『古事記』を意味づけるためには、『日本書紀』との徹底した比較が大事です。実は私も現在それをやっております。国文学をはじめとして、最近の論文はそのことを意識してやっております。これを徹底させたのが武田先生です。武田先生の『古事記研究 帝紀攷』この本の持っている最大の意味は、『日本書紀』との徹底した比較です。これは皆さんがこの本を分析なさると、私も最初は気づきませんでした。これが、ご理解いただけたらと思います。『日本書紀』との比較から何が導き出せるのか、そのことを徹底してみたい。それが方法論として、一番大事なことなんだろうということです。それをここに書いてあります。「宇比地迹」以下は恐らく『古事記研究 帝紀攷』を意識した記事、走り書きだと思っています。先生の講義ノートは、そういう意味で言いますと先生の研究と直結しております。それと同時に、この講義ノートを見ながら恐らく、いま私がしゃべったようなことを学生に伝えてきたと思います。学生たちがこの内容を理解できたならば、恐らく当時では第一線の『古事記』研究者たり得たんだという気がします。私の仕事もこういった講義ノートの分析を通して『古事記』の最新の研究を学生に伝える、それがいま國學院の学問として生きていく。そういうことを心がけることだろうというふうに思っております。そういう意味で、我々のプロジェクトは、ただ単に過去の偉大な先学を研究するのではなくて、その学問の方法を学び、成果を学び、それをどうやって発展させ、今後の國學院の学生たちに残していくか、それがもっとも大事な点だろうというふうに思います。今日のお話は、そういうことの一つの例として武田先生の講義ノートを紹介させていただいたということです。

風邪の声で聞き苦しかったと思います。短い時間ではございましたが、これをもちまして話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

付記

渡邊 卓

この講演録は、平成二十年十月三日に学術メディアセンターの常磐松ホールで行われた公開講座のものである。本誌には青木周平先生の論文を掲載する予定であったが、思い適わず公開講演の様子を掲載する運びとなった。青木先生は、この講演の約一ヶ月後となる十一月十一日、午後七時五分に食道がんのため急逝された。享年五十六歳であった。青木先生は、國學院大學文学部日本文学科の教授であり、研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター教授も兼任された。伝統文化リサーチセンターでは「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトの研究代表者であった。先生はいつも温厚であり、先生を慕う学生は多く研究室はいつも賑やかであった。

講演直前の九月二十三日には、國學院短期大学にて、同短期大学と伝統文化リサーチセンターの共催による公開講座が行われ、青木先生は総合司会を務められた。公開講座のテーマは「國學院の歴史と学問」であった。このとき既に声が出にくい様子であったが、講座では研究代表として壇上に立たれ、先生ご自身も國學院の学問や国学についてお話になった。

青木先生は日本上代文学を専門としながらも、掲載した講演録にあるように「国学」を常に考えておられた。なかでも近年は武田祐吉を中心として「国学」の研究に取り組まれていた。武田祐吉の旧蔵本は「武田祐吉博士記念文庫」として本学に所蔵されているが、新たに伝統文化リサーチセンターのプロジェクトの過程で、未整理の資料が発見された。新出資料は自筆原稿・講義メモ・ノート・カード・書簡などであり、講演録の中で青木先生が用いられ

た講義メモはその一部である。青木先生は、この講義メモ（講義ノート）の中から〈古事記学〉という言葉を見出されたのであった。

青木先生の最後の出校日は、十月二十九日であったが、この日は伝統文化リサーチセンターのフォーラムが開催された。「國學院における近代国文学の形成―武田祐吉の学問を中心に―」というテーマで、本学名誉教授の中村啓信先生と青木先生と私が発表の予定であった。しかし、青木先生は開会にあたってのご挨拶と中村先生の発表に対しご質問をなさるにとどまった。その質問においても〈古事記学〉という用語についてお尋ねになられた。武田祐吉の聲に触れた中村先生は、青木先生の恩師でもある。武田祐吉から、今日に継承されている國學院の文献学の流れを、青木先生は強く意識されていたのである。その学問の一端を表した用語が〈古事記学〉であったのであろう。先生は國學院の学問を現代の大学院生や学生に引き継ぎ、これからどうすればいいか、どうあればいいかということを常に考えていらつしたたのである。青木先生のから賜った御学恩に心から感謝申し上げます、ご冥福をお祈り申し上げます。

古事記研究（古事記集）

提示

總說
人
書史
古典

書史

本論、分解と綜合（部分と全體）

命解

帝心

本

倉部

方小全 5-

712-9

總發

古子江序文

帝紀

帝紀の考索

本解の考案

二、即此方

二、結合、状態

大石の方針

三
目的
た
て

高橋の成る

日中を以てふ。ありあけ。

五、醫院

修竹 如生才十七瓦

平可字季疏目

市二區

五二五

日本帝國
二月二十
天

上中下

榮帝記曰少微曰天子之世五帝啟戶

豐聯
平長臣言
以子皆不

共平素所建立三

持後以
二
三
四
五

直廣歸多社美人昭然帶謀自社

之
考
紀
治
身
禮
也
古
云
日
副

包紀紅
新明大書

息長山田公奉誅

提示

古事記の存在

イ、その成立に於いて

ロ、その傳來に於いて

傳説を通じてその成立を窺ふ

傳説に存在するものの意義

研究法

イ、その周圍から 文献、書史、時代

ロ、物的觀察 言語(文法)による表現

ハ、内容

批評と解釋、材料の把握

解釋

分析と綜合(部分と全體)

太古史としての意識

古史表現の考察

今との比較

(一) 事イザナ

今に至るまで

後述 古史研究

組織

分析の可能

一、文章

二、書名

三、書名

四、書名

五、書名

六、書名

七、書名

八、書名

九、書名

十、書名

方法論としての考察

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

総合

分析

昭和十三年九月十日印刷 昭和十三年九月十四日發行 昭和十三年十二月十八日訂正發行	不許複製	編者	武田祐吉	發行者	株式會社明治書院 東京市神田區錦町一丁目十六番地 電話掛長三二四三	印刷所	株式會社明治印刷所 東京市神田區三條町二丁目一番地 電話掛長三二四三	發行所	東京市神田區錦町一丁目 株式會社明治書院發行所 電話掛長三二四三	株式會社明治書院	電話掛長三二四三
---	-------------	-----------	-------------	------------	--	------------	---	------------	---	-----------------	-----------------

定價金四拾錢

抄本文太平記（翻刻）